

在京白聖會報

創刊号

平成8年11月24日

会報発刊のご挨拶



在京白聖会会長

(昭和二十五年卒)

及川昭伍

在京白聖会は昭和四十四年に創立されました。その前年の昭和四十三年に母校盛岡一高の野球部が甲子園に出場し、在京同窓の有志多数が甲子園に応援に駆けつけたことが契機となって結成されました。

創立総会には百人余が集まりました。この会は、会員相互の親睦だけを目的とし、会長もおかず、会員一人ひとりが会長ということとで発足しました。昭和十七年卒の工藤祐正弁護士に事務所をひきうけていただきました。以後、毎年母校の創立記念日である五月十三日に総会懇親会を開催してきました。

総会は、当初の十年間は上野精養軒で、その後は原宿の東郷記念館で開催してきました。両方とも同窓生が役員をされているご縁でお世話頂いてきました。在京白聖会創立二十周年の平成二年には、二十周年記念誌を発行しました。

その後間もなく、事務所とともに、事実上の代表幹事を引き受けてこられた王藤弁護士が急逝されました。在京白聖会事務所は平成四年から、昭和四十三年卒の星野健秀弁護士に引き受けていただいていたに至っています。

在京白聖会は年々盛大となり、総会懇親会の出席者も、今年は三百五十人を超えるようになりました。

た。年会費の納入者八百人、会員名簿登載者二千五百人となりました。若い人たちの参加により、今後ますます増加していくものと見込まれます。会員から会務執行体制の整備の要望が強くなり、規約を改正して、今年から、年次代表幹事、常任幹事、事務局長、会長、副会長というような体制を取ることにしました。あわせて会報を発行し情報交流の緊密化を図ることにしました。

今年の総会で私が会長に選出されました。私たちの年次は、昭和十九年に旧制盛岡中学に入学し、戦後の学制改革により新制高校に移行し六年間白聖の校舎で学びました。盛岡中学と盛岡一高の両方をよく知っている者として指名されたものと考え、非才ですがつとめさせていただきますので、ご協力をお願いします。

今年は同窓の宮沢賢治の生誕百年、石川啄木の百十年で郷土も母校も賑わっています。私も八月に帰郷し、秀麗高き岩手山、清流長き北上川で浩然の気を養い、賢治記念館、啄木記念館の新しい展示を見てきました。

在京白聖会の活動、特にこの会報が、青春の学びやを共にした皆さんの、親睦、交流にお役にたつことを心から念願致します。

中



八年度総会、空前の大盛況

年次大会担当常任幹事 (昭和三十九年卒) 田野成智

『岩手県』と言うときは潜在意識的には多少委縮していた自分が、『盛岡』『岩手山』或いは『北上川』

と言うときは、胸中に望郷の疼きを感じつつ、『余所には絶対無い素晴らしいものに所属している』といったように、一面誇らしげにしている自分が感じられます。

ましてや『盛岡一高』と言うときの自分は、もう完全に舞い上がっております。そこには永い伝統

に培われた校風とやさしさに満ちた豊かな自然に囲まれた学舎がありました。

学業面の優秀さもさることながら、実に多くの素晴らしい友との出会い、或いは初めて気付いた異性への恋慕の情など、かけがえない青春の三年間があったからだと思います。

年に一度これらの思い出をリフレッシュし、『盛一ソサイアティ』の重厚さを再認識できる会、それが在京白聖会だと思えます。

本年は我々三十九年卒業者が総会の企画・進行の大役にあたらせて頂きました。昭和二十年頃の生まれである私たちは、戦後民主主義と共に生きてまいりました。そのような背景もあり平等を欠くことは避けたいとの考えから、約二千八百名の会員の方全てに案内状を差し出すことといたしました。その結果三百五十名にもおおよ半数のご出席を頂くことができました。

本年は宮沢賢治先輩の生誕百周年にあたり全国各地で色々な企画や催事が執り行なわれておりましたので、今回は白聖の伝統の主流『忠実自強』『質実剛健』『文武両道』を少し離れて『白聖的人間味』の表現に重点をおいて演出してみました。

「さんさ踊り」や「八幡神社の音頭上げ」のアトラクションは好評を頂きました。殊に音頭上げで会場で「うおー・うおー」と鬨の聲が上がったのには驚きました。閉会後出口でおほめの言葉を沢山頂き感激致しました。誠に有難うございます。今は亡き先輩「工藤祐正」元世話人が平成二年の白聖通信に寄稿され、そのなかで在京白聖会の意義を次のように述べておられました。

『都会生活の中で利害を忘れて自由に語り合える会の仲間が居るということはなんとも有り難いことであり、貴重な財産である。この財産を得る機会を与えてくれた親

にたいして改めて感謝せざるを得ない。』と……

先輩諸兄の努力により誕生し育まれてきたこの在京白聖会に対して心から感謝し、将来に向かって益々大きな広がりとなるように祈っております。本年も会場のお世話など全面的にご高配を賜りました松橋先輩には心から感謝申し上げます。有難うございました。



発行 在京白聖会

東京都港区虎ノ門一丁目十六番八号

飯島ビル2002号

星野健秀法律事務所内

TEL 03(3503)6789
FAX 03(3503)7854



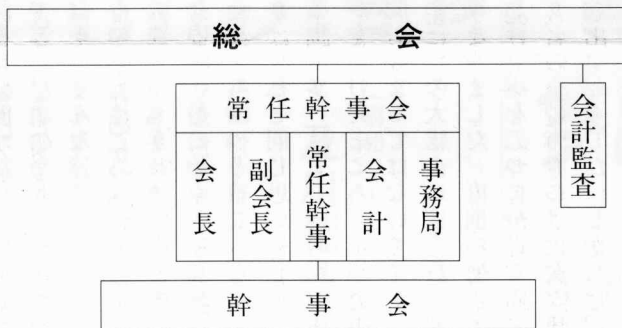
新しい会則と体制のあらまし

平成七年七月に、組織化に対応した新たな在京白聖会のあり方を検討すべく「改革検討委員会」が設置されました。委員会での議論の結果、①会長制を基本とする新会則②組織拡大と財政基盤の確立対策を幹事会に諮問し、了承を得、総会の場で可決しました。新会則の骨子は次のとおりです。

一、複数代表制から会長制へ変更
二、執行機関としての常任幹事会を新設

三、事務局から会計を分離
これに伴う組織機構は図のようになります。また、平成八年度の常任幹事会役員は、名簿のとおり総会で承認されました。

在京白聖会組織図



平成8年度 在京白聖会常任幹事会

役 職	氏 名	卒業年次
会 長	及川 昭伍	昭25卒
副会長	大平 洋司 外山 浩子	昭26卒 昭32卒
世代代表	八重畑達男 松橋 輝男 春山攻一郎 白石源次郎 日向 裕司 巽岩 玲子	昭18卒 昭25卒 昭37卒 昭41卒 昭54卒 昭60卒
前年度年次大会代表	荒木田 修	昭38卒
当年度 "	野田 成智	昭39卒
次年度 "	戸澤 聡	昭40卒
会 計	岩瀬佐千世	昭48卒
事務局長	星野 健秀	昭43卒
事務局次長	岩澤 新治	昭45卒

「啄木と賢治」のロマンにふれて 盛岡で白聖同窓会総会を開催

去る十月二十日、盛岡のニューウィングホテルで白聖同窓会百十六周年総会が開かれました。総会では、平成七年度の活動報告の他に事業企画委員会での検討状況が紹介されました。創立百二十周年にむけて、事業の見直しと財政の改善策を検討している模様です。つづいて、かつて盛岡一高で教鞭をとった盛岡大学の遊座昭吾教授より、「啄木と賢治」の記念講演がありました。若き生命を燃焼し尽した

二人の文学を育んだ白聖校での風土と人脈。時代を超えて人々の共感を得てやまない人間と宇宙の真理に迫る詩情。稀有な文学者を先輩として仰ぐ白聖人の誇りを参加した約二百名の同窓生が感じました。感動の講演をうけた懇親会では、在京白聖会事務局の方から東京での活動ぶりを報告しました。会場では、野球部の秋の活躍ぶり（県大会優勝）と来年への期待が酒宴の話題になっていました。

工藤事務所での在京白聖会

ふるさとをなまりをなつかしんで上野駅に立った啄木のように、工藤事務所に行けば盛岡の雰囲気を感じた。そこには盛岡の先輩、一高の後輩が工藤先輩を囲んで談笑している。

「おろよぐきた、まあ一杯やれ」先輩の勧めで挨拶もそこそこに酒盛りの輪にいれてもらおう。飲むほどに酔うほどに、応援団長になった工藤先輩がわれわれ後輩に喝を入れる。事務所の中は一瞬静まり、あの工藤節が始まると、かつて

応援歌練習をした盛中の講堂にいる気分になる。校歌がうたわれるころは、みんなの目が輝きだれもが若々しくみえ、時空を越えた一体感にしばしひたる。伝統のあるすばらしい高校に学び、良き同窓にめぐりあえたことに喜びを感じるときでもある。再開を約して帰宅するときまでその余韻はまだ残っていた。今は亡き工藤先輩に衷心より感謝し在京白聖会を大切にしていきたい。

副会長

大平洋司(昭和二十六年卒)

在京白聖会に参加して

裴岩玲子(昭和六十年卒)

思い起こせば、在京白聖会の存在を知ったのはちょうど一年前のことだったと記憶しています。どこかで誰かが開催しているのだろ

うなあ……とは思っていましたが、ふとしたきっかけでその存在を知ることになり、気付いてみれば若手(?)の「白聖百の会」の会長をさせていただくことになっていま

した。
何年か前のこと、分厚い白聖名簿をパラパラ見ていた実家の母が、「あなたの会社にも随分一高の卒業生がいるわよ。一度集まってみたらおもしろいのに。」と冗談半分で言っていたことがありました。
社内には各大学のOB会は多数存在するのですが、さすがに高校のOB会はありません。自分の会社だけではなく、他の方面で活躍する卒業生に会ってみたい、と思っていたところに在京白聖会のお誘い。「これは絶対出なくちゃ。」と即座に思いました。案の定、色々な分野で活躍する、何世代にもわたる先輩方とお会いすることがで

きました。生まれ育った土地を離れ、東京砂漠に暮らすサラリーマンの一人として、こんなに心強いと思ったことはありません。

私は仕事から初対面の方とお会いする機会が多いのですが、出身を聞かれ、「岩手の盛岡です。」(残念ながら「盛岡」だけでは通じないです)と答えたときの、相手の驚き。「なんでそんな遠くから働きに来てるの?」なのか、「岩手ってどこ?」なのか、「うわあ、田舎モン……」なのか、とにかくとても驚かれ、そしてちょっと寂しくなりま

す。きっと私と同じ思いをしている卒業生は多いはず。同級生や後輩に声をかけたところ、二つ返事で仲間が集まるではないですか。五月十三日の大総会には多数の同輩が集まりました。直前の増員のため急遽会場を二つに分けることとなり、幹事の方々には大変ご迷惑をおかけしました。しかしながら、今まで集まることのなかった二十代が東京で一堂に会し、先輩と顔を合わせることができたこと



題字揮毫

天頼書道会主宰 浅沼一道氏(昭和二十七年卒)

プロフィール

昭和63年 盛岡一高「白聖高百年史」の題字を揮毫。
昭和55年 毎日書道会創立四十周年記念ヨーロッパ巡回展に代表出品。
平成5年 東郷神社「和楽殿」木標揮毫。
平成8年 中国西安臨潼の華清池に記念石碑を揮毫建立。
現在 書宗院相談役、全日本書芸文化院常任運営総務。

は、貴重な経験になったと思います。当日出席できなかった仲間からは、是非とも次回は……という熱いメッセージも届いています。美しい故郷を持つバンカラな卒業生同士、今後とも長くお付き合い合わせていただけることを心からお祈りしております。



白聖の若い力!

青春白聖

本年の東郷神社での総会では、三百五十名参加の盛況でしたが、その陰には不参加ながらも会費を納めて頂いた多数の会員諸氏がおり、そのお心に対しても、会員相互の情報交換の場としての会報を出そうというところで発刊いたしました。

今後は、皆様の近況等も掲載して紙面を充実させたいと存じますので、ぜひご投稿をお願い致します。「在京白聖会よ永遠なれ!」の思いを込めて編集後記とします。

広報部長

春山攻一郎(昭和三十七年卒)